

『新勅撰和歌集』にみえる後鳥羽院たちの幻影

瀧 倉 朋 世

はじめに

書陵部蔵『新勅撰和歌集』奥書に文暦元（一二三三）年のことと思われる記載、「十一月上旬頻有召。九日参上。撰進古歌等、殊預御感言。猶時輩歌有承旨等。」がある。時輩歌を主に三上皇、承久の乱関係者と先行研究では捉えられている。また、『百鍊抄』同年十一月九日の記載に「中納言入道〈定家卿〉。於前関白家披覽新勅撰。〈先院御時被奏覧〉。両殿下監臨有用捨事。被切弃百首云云。又有被入之人云々。」とあり、そこから次のように考察されている。

山下三十鈴氏は、『新勅撰和歌集』一八〇二一までの曾根好忠の歌四首と三〇、三一の二首連続した実朝の歌、前者が「青柳」、後者が「梅花」と主題を分かち位置であることから、

曾根好忠の四首、実朝の二首の入集歌を取り上げ、切り入れられた歌人とされている¹⁾。

また、樋口芳麻呂氏は『明月記』〈文暦二年一月七日、二月五日〉の記事から、「大僧都経円（一一九一歌）や京極北政所従一位麗子の歌（一一九八歌）が切り入れられたものらしい」²⁾『新勅撰集』のあとの『続後撰集』〈為家撰。建長三年（一二五一）奏覧に選入され、しかも『新勅撰集』には見出せない承久の乱の公家方歌人の詠を求めると、後鳥羽院二九首、土御門院二六首、順徳院一七首、雅成親王（六条宮）九首などが挙げられる。以上の四歌人で計八一首で、これらの歌の多くは『新勅撰集』未定稿本に収められていたかもしれない（為家は父定家がやむなく省いた歌が空しく埋もれるのを惜しみ、父の志を生かすべく、『続後撰集』にその多くを選入したのであろう。）と述べ

られている^②。

一

また、佐藤恒雄氏は次のように述べられている^③。

『新勅撰集』の撰集作業最後の段階で、文暦元年十一月九日、三上皇の詠などおよそ百首を切り出したことによって、集の性格は大きく変わってしまった。周知のように幕府との関係悪化を懸念した道家の指示によるものであったが、そのときの道家の苦衷はいかばかりであったか、思い半ばに過ぎるものがある。しかしそれはそれとして、百余首を切り出したままで集が治定したのではなく、以後若干の歌が切り入れられた痕跡もある。……天福二年六月三日段階の本が一四九八首、本巻に影印される最終的精撰本が一三七四首という歌数の計算からすると、この種切入れはせいぜい二十首前後であったかと推定されるが、以下に述べる巻八「羈旅歌」の三首も、あるいは三院の歌を削除した代替としての意図をこめて切り入れられた歌であったかもしれない」とされ、『新勅撰集』（『新勅撰和歌集』を『新勅撰集』と略称する。他の勅撰集なども同様）四九四、四九五、五一三をあげられている。

大宰帥に侍りける時、府官らひきゐて、香椎浦にあそび侍りけるによめる
大納言旅人

いざやこらかしひのかたに白妙のそでさへぬれてあさなつみてむ

越中守に侍りける時、くにのつかさ布勢のみづうみにあそび侍りける時よめる
中納言家持

ふせのうみのおきつしらなみありがよひいやとしのはに見つししのばむ

土佐のくにに年へ侍りける時、うたあまたよみ侍りけるに
藤原兼高

暁ぞ猶うき物としられにしみやこをいでしありあけのそら
四九四、四九五は任地における歌のため「雑歌に入れる方がふさわしいとも思えるこの二首を、羈旅歌として、しかも巻頭に配したことの中に、定家のある意図ないしは意識のありようを読み取りたい。」とされ、大納言旅人に隠岐の院（後鳥羽院）を、中納言家持に佐渡の院（順徳院）を、イメージしていたのではない。五一三は、「土佐国」という詞書と歌の内容とによつて「土御門院とその望郷の念を重ね合わせていたのではあるまいか。確証に乏しい憶測ではあるが、私は右に述べてきたような暗号を無意味なものとは考えない。定家はこのような歌

を、切り出した三上皇の歌に代置することによって、三院への慰撫の心をそれとなく表明し、いささかなりと良心のいたみを柔らげようとしたのではなかったか。百余首の切出しに對する不満が『百人一首』の撰歌を支配した基底的心情であつた（樋口氏）とすれば、右のような意識に發するこの程度の集の手なおしはむしろ当然であつたとの感を深くするのである。」と述べられている。

『越部禪尼消息』では、勅撰集の評価が続く中、『新勅撰集』については後鳥羽院たちの和歌が採られていないことを批判している。また、現在では次の『続後撰集』で三上皇たちが採られたことを「復権」と評価されている。これらのことは、一首もみえないことがより一層、後鳥羽院たちを感じさせるのではないだろうか。先行研究をふまえながら、検証をすすめ、三上皇の和歌を天福二年本『新勅撰集』から除棄し、為家が『続後撰集』にそのまま入れたと推測した。⁽⁴⁾それがどの和歌であるかを定家が、文暦二年『新勅撰集』現存精撰本に除棄歌を匂わせる和歌を入れていることを歌の内容、配列ほかから検証をすすめた。本論文では、引き続き考察したい。

貞永元年（一二三二）六月十三日に、定家は、後堀河天皇から撰進を命じられ、同年一〇月二日に仮名序代と二十巻部の目錄を一紙に記して奏覽している。天福二（文暦元）年（一二三四）「五月『新勅撰集』の草稿本を一見したいから進入せよ」と後堀河院より仰せがあり、天福二年六月三日庚午に、後堀河院の要請で急遽、定家が、自写して計一四九八首の集を進覽した。同年八月六日に、後堀河院が崩御され、定家は落胆のあまり、翌日七日、草稿本の原本を自宅の庭で焼棄する。十月下旬になつて、後堀河院の手もとに残っていた定家書写の草稿本を、大殿すなわち前関白藤原道家が探し出した。十一月九日、道家から草稿本中の古歌については、おほめの言葉があつたが、同時に当代歌人の詠に関して「承る旨など」があつた。十一月十日、草稿本を賜り、百余首を除棄して進上し、清書は道家から世尊寺行能に十五日に依頼された。『百鍊抄』では、百首切り捨て、また切り入れられた歌もありとある。文暦二年三月一二日に清書の『新勅撰集』精選本、現存本の一三七四首を有する集が、道家のもとに進上されたことを定家は、為家から伝え聞いたとある。

天福二年の一四九八首の集を定家が撰集している間にも、天福二年十一月十日から撰者用の書写、一四九八首から和歌の除棄、切り入れがなされた、定家のいうところの見苦しい本を為家は見ていた。このように間近で事情を知っていた為家は、いつか、自身が勅撰集撰者になった際には、定家が採りたかった和歌を入れたと考えていたのではないか。

以下、『新勅撰集』を天福二年の一四九八首の集と、文暦二年の現行本、一三七四首を有する集を区別して論じていくため、それぞれ、天福二年本と、文暦二年本と称する。

まず、承久の乱関係者で『新勅撰集』に採られている和歌について考える。

三

文暦二年本『新勅撰集』は一三七四首、『続後撰集』一三七一首とはほぼ同じの歌数と考え比較する。承久の乱関係者ではあるが『新勅撰集』に採られている歌人のうち、光俊、忠信、如願について、三人の入集歌数を『新勅撰集』↓『続後撰集』であげてみると、光俊（四首↓一〇首）、藤原忠信（五首↓二首）、如願（九首↓五首）となる。光俊以外は『新勅撰集』

の方が入集歌が多い。また、承久の乱のときには出家はしていたが、後鳥羽院の皇子である、道助法親王は後鳥羽院の勝利を祈禱したかといわれているが、（一首↓九首）入集している。これらの中に代替歌が含まれているかどうか考察する。

『続後撰集』入集歌の内、『新勅撰集』成立以前に詠まれたと考えられる三上皇らの和歌は少なくとも 四十四首ある。以下、天福二年本『新勅撰集』から除棄された歌を『続後撰集』入集歌から想定し（除棄歌）、文暦二年本『新勅撰集』の配列などから、代わりに採られた可能性のある作（代替歌）を推測して検討する。除棄歌は「除棄歌」として太字表記、代わりに入れられたと推測される和歌は「代替歌」として太字表記して示す。

(a)

題しらず

春宮権大夫良実

たちばなのしたふく風やにほふらむかしながらのさみだれのそら
〔『新勅撰集』巻三・夏歌・一七〇〕

代替歌

〔『新勅撰集』巻三・夏歌・一七一〕

関白左大臣家百首歌よみ侍りけるに 藤原光俊朝臣

五月雨のそらにも月はゆくものをひかり見ねばやる人のなき

建保二年内裏百番歌合に

参議雅経

みつしほのからかのしまに玉藻かるあままも見えぬ五月雨の
ころ
〔続後撰集〕 卷四・夏歌・二二二

除棄歌

『続後撰集』 卷四・夏歌・二二三

建保二年内裏百番歌合に

順徳院御製

さみだれの雲のはれまをまちえても月見るほどの夜半ぞすく
なき

①の除棄歌は『続後撰集』二二三、建保四年内裏百番歌合で出
詠した和歌で、主題は「五月雨」で、抜かれたあとに、文暦二
年本『新勅撰集』一七一歌を定家が入れたと推測する。『新勅
撰集』一七一の出典『洞院撰政家百首』（上・四七六）は次の
通りである。

五月雨五首

光俊朝臣

さみだれの空にも月は行くものを光みねばやしる人のなき

『続後撰集』二二三の出典、建保四年内裏百番歌合では、次
のようにみえる。

二十一番 夏 左勝

御製

五月雨の雲の晴まを待ちえても月みる程の夜はぞすくなき

右

定家

ほととぎすがしのめをねにたてて山のしづくにはねしほ

るらん

左景気見様也と満座申之為勝

『新勅撰集』一七一は、同じ主題で、二つの和歌は、歌の内容
が似ているだけでなく、次のような共通点がある。『新勅撰集』
一七一の詠者、光俊の父光親は、乱の首謀者として斬られ、光
俊自身も承久の乱以後、（承久三年七月）筑紫に流されている。
また、母は順徳院の乳母であり、光俊と順徳院とは兄弟同然と
も考えられる。光俊の父、光俊の母は順徳院と関わりが深く、『続
後撰集』二二三の和歌を除棄した後に、文暦二年本『新勅撰集』
一七一を入れたのであろう。

配列でそれぞれ一つ前、〔『新勅撰集』一七〇と『続後撰集』
二二二〕においては、どちらも万葉歌を本歌とした作であり、『新
勅撰集』一七〇は、『万葉集』卷二十・四三七一歌・助丁占部広
方の

多知波奈乃^{タチハナノ} 之多布久可^{シタフクカ}是乃^{セノ} 可具波志伎^{カクハシキ} 都久波能夜麻乎^{ツクハノヤママ}
古比須安良米可毛^{コヒスアラメカモ}

『続後撰集』二二二は、『万葉集』卷六・雑歌・九四三歌・山部
赤人の

玉藻^{タマモ}乃^ノ 辛荷乃^{カラニ}嶋^{シマ}尔^ニ 嶋廻^{アサリスル}為流^ル 水鳥^ウ二^ニ四毛^{シモ}有哉^{アヤ} 家不念^{イヘオモハサラ}有^ラ
六

からそれぞれ本歌取りしている。万葉歌をふまえた詠としてい
るところが共通している。

また、『統後撰集』二二二の詠者、雅経の父（刑部卿頼経）
は源義経と事を謀った罪科を問われて伊豆に配流されている。
承久の乱関係者ではないが、配流された父を持つ雅経の和歌の
配列に為家の工夫が感じられる。これらのことから、定家が天
福二年本『新勅撰集』から除棄した和歌を為家が『統後撰集』
にそのまま採ったと推測できる。

⑥

代替歌

『新勅撰集』卷五・秋歌下・三三〇

秋歌よみ侍りけるに

如願法師

月になくかりのはかぜのさゆる夜にしもをかさねてうつ衣か
な

除棄歌

『統後撰集』卷七・秋歌下・三九三

名所歌めしけるついでに

後鳥羽院御製

雲井とぶかりのはかぜに月さえてとば田のさとに衣うつなり
⑥の除棄歌は『統後撰集』三九三で、抜かれた後に文暦二年
本『新勅撰集』三三〇を定家が入れたと推測する。『新勅撰集』

三三〇の出典は『如願法師集』四七八、次のようにみえる。

五人に甘首めして百首にかきなされしときの秋歌

月になくかりのはかぜのさゆるよにしもをかさねてうつころ
もかな

建暦二（一二二二）年一月から二月にかけて後鳥羽院が、
定家、秀能（如願）らに各二〇首詠進させ、自らも二〇首詠ん
で計一〇〇首としたものの一首である。

一方、『統後撰集』三九三の出典は、『最勝四天王院和歌』
二四一（鳥羽・山城）で承元元年、後鳥羽院主催、名所障子
絵四六箇所添えるために詠まれたうちの後鳥羽院の詠歌
で、後鳥羽院が隆盛を誇っていた頃の和歌である。『統後撰集』
三九三、『新勅撰集』三三〇ともに類した漢詩として『和漢朗
詠集』三四六・擣衣・作者不明の「北斗星前横旅雁 南樓月下
擣寒衣」がまた、『新勅撰集』三三〇は、『白氏文集』卷三三の
「月帶新霜色 碁和遠雁声」があげられる。『統後撰集』三九三
と『新勅撰集』三三〇は、「ころもうつ」以外に「雁の羽風」
も詠まれ、和歌の意味、内容も似ている。また、『新勅撰集』
三三〇の出典の『如願法師集』四七八は後鳥羽院が詠進させた
和歌で、如願法師は、承久の乱で兵士として活躍し、配流は免
れたが、後鳥羽院の側近の一人であった。「擣衣」で詠まれて

いることにも如願が院を思う意図が感じられる。定家は『続後撰集』三九三を天福二年本『新勅撰集』から除棄し、『新勅撰集』三二〇を採ったと推測される。

③

代替歌

『新勅撰集』巻五・秋歌下・三二一

秋歌よみ侍けるに

真昭法師

あらしふくとほ山がつのあさ衣ころも夜さむの月にうつなり

除棄歌

『続後撰集』巻七・秋歌下・三九五

擣衣の心を

順徳院御製

をぐら山すそのさとのゆふぎりにやどこそ見えね衣うつなり

③の除棄歌は『続後撰集』三九五、抜かれた後に入れた和歌は文暦二年本『新勅撰集』三二一と推測する。共に主題は「擣衣」、文暦二年本『新勅撰集』三二一の他出はなく、類歌として指摘されるのは次のような『新古今集』秋下・四七九や、『紫禁和歌集』五七六がある。

和歌所歌合に、月のもとに衣うつといふことを

摂政太政大臣

さとはあれて月やあらぬと恨みても誰あさぢふに衣うつらむ

(『新古今集』秋下・四七八)

宮内卿

まどろまでながめよとのすさびかなあさのさ衣月にうつ声

(『新古今集』秋下・四七九)

同比(建保三年八月頃)当座、擣衣

時しもあれたが里人のから衣ころも夜寒の月にうつらん

(『紫禁和歌集』五七六)

『続後撰集』三九五の出典は『紫禁和歌集』一〇九〇である。

同(建保六年九月)廿五日、当座詩歌合、秋歌

をぐら山すそ野の里の夕煙宿こそみえね衣うつなり

(『紫禁和歌集』一〇九〇)

文暦二年本『新勅撰集』三二一は類歌として宮内卿や順徳院の影響が大きい。

また、『新勅撰集』三二一の舞台となっている、荒れ果てた故郷とは、『続後撰集』三九五の一つ前の和歌、三九四と共通している。

擣衣の心を

土御門院御製

あさぢはらははぬしものふるさとにたれわがためと衣うつらん
(『続後撰集』巻七・秋歌下・三九四)

しほ火

『新勅撰集』卷十三・恋歌三・八五四

除棄歌

『続後撰集』卷十一・恋歌一・六六一

百首歌めしけるついでに

後鳥羽院御製

おもひのみつものあまのうけのをのたえねばとてもくるよしもなし

④の除棄歌は『続後撰集』六六一、抜かれた後に文暦二年本『新勅撰集』八五二を入れたと考えられる。『続後撰集』六六一の主題は「忍恋」、出典である『建保四年二月御百首』は散佚しており、『後鳥羽院御集』では「建保四年二月御百首」五七八にみえる。

(題しらず)

正三位家隆

心からわが身こす浪うきしづみうらみてぞふるやへのしほ風

『新勅撰集』卷十三・恋歌三・八五二

代替歌

『新勅撰集』卷十三・恋歌三・八五二

題しらず

平忠度朝臣

たのめつつこぬ夜つもりうらみてもまつよりほかのなぐさめぞなき

源家長朝臣

こぎかへる袖のみなどのあまをぶねさとのしるべをたれかをしへし

『新勅撰集』卷十三・恋歌三・八五三

真昭法師

いはみがた浪ちへだててゆくふねのよそにこがるあまのも

また、文暦二年本『新勅撰集』八五二の主題は「海(水)辺に寄する恋」で、出典は『治承三十六人歌合』(十四番・寄松恋)である。

『続後撰集』六六一(恋しい思いばかりが積もる津守の浦の海女たちの浮けの緒が絶えないように仲は絶えない、とは言っても逢いに来る手立てもない)と『新勅撰集』八五二(幾度もあてにさせては来ない夜が積もり、恨んでも待つよりほかの慰めがないことよ)は、歌枕の「津守のうら」が共通である。ただ『新勅撰集』八五二は「来ぬ夜積もり」の「津守」と「積も

り」が掛けられ、「浦」と「恨み」が掛けられている。『続後撰集』六六一は「津守」と「積もり」は掛けられているが、「恨み」の意はない。待つより他がない所など和歌の内容も似ている。また、『新勅撰集』八五二の詠者、忠度は俊成に和歌を学び、都落ちする時に俊成に歌の巻物を預け、勅撰集を編むことがあれば自身の和歌を入集させてほしいといった説話が有名である（『平家物語』など）。都を後にし、忠度は戦死するが、都を追われるところが『続後撰集』六六一の詠者、後鳥羽院と共通である。これらのことから、定家が『続後撰集』六六一を除棄し、その代わりに、文暦二年本『新勅撰集』八五二を入れた可能性が考えられる。作者時代順の配列からいうと、家隆歌の次に後鳥羽院詠があるのがふさわしい。

題しらず

鎌倉右大臣

もののふのやそうち河をゆく水のながれてはやくとしのくれ
かな
（『新勅撰集』巻六・冬歌・歳暮・四三七）

五十首歌よませ侍りける時、年のくれををしむといへる
心を
入道二品親王道助

とどめばやながれてはやく年波のよどまぬ水はしがらみもな
し
（『新勅撰集』巻六・冬歌・歳暮・四三八）

正三位家隆

つらかりし袖のわかれのそれならでをしむをいそぐ年のくれ
かな
（『新勅撰集』巻六・冬歌・歳暮・四三九）

代替歌

『新勅撰集』巻六・冬歌・歳暮・四四〇

五十首歌よませ侍りける時、年のくれををしむといへる
心を
如願法師

あすか河かはるふちせもあるものをせく方しらぬとしのくれ
かな

除棄歌

『続後撰集』巻十六・雑歌上・川・一〇一八

人人に百首歌めしけるついでに
順徳院御製

あすかがはななせのよどにふくかぜのいたづらにのみゆく月
日かな

③の除棄歌は『続後撰集』一〇一八で、抜かれた後に文暦二年本『新勅撰集』四四〇を定家が入れたと推測する。『続後撰集』

一〇一八の出典は『建保名所百首』一〇二二で、次のようにみえる。

飛鳥河大和国

明日香河七瀬のよどに吹く風のいたづらにのみ行く月日かな

また、文暦二年本『新勅撰集』四四〇の出典は『道助法親王家五十首』八三五で、次のようにある。

惜歳暮

あすかがはかはる淵せもあるものをせくかたしらぬとしのくれかな

『統後撰集』一〇一八では、雑歌上に入っているが、もとは歳暮の歌として採られていたかと思われる。『統後撰集』一〇一八の主題は「川」で、月日が飛鳥川の上を吹く風のように空しく過ぎていく、と『新勅撰集』四四〇では、冬歌（歳暮）、部立、主題は違っているが、「あすか河」が共通で、『新勅撰集』四四〇も、流れの早い飛鳥川でさえ流れに遅速があるのに、年が暮れるのを堰き止める手段がわからないと、和歌の内容も似ている。⁽⁵⁾ 順徳院御製が如願法師の所に配置されていたかと思われる。『新勅撰集』四三七から主題が「歳暮」となり、その四三七から四四〇は、実朝、道助法親王、家隆、如願法師と乱関係者の歌群が形成されている。この配列に定家のこだわりを感じる。

①

代替歌

建保三年五月歌合に、暁時雨といへるころをよみ侍り

ける

権大納言忠信

あかつきとうらみしひとはかれはてうたてしぐるるあさちふのやど

〔『新勅撰集』巻十六・雑歌一・一一〇〕

百首歌よませ給うけるに、懷旧の心を

土御門院御製

秋の色をおくりむかへて雲のうへになれにし月もものわすれすな

〔『統後撰集』巻十八・雑歌下・懷旧・一二〇三〕

題しらず

権中納言国信

てる月の雲井のかけはそれながらありし世をのみ恋ひわたるかな

〔『統後撰集』巻十八・雑歌下・懷旧・一二〇四〕

除棄歌

題しらず

順徳院御製

もししきやふるきのきばのしのぶにも猶あまりある昔なりけり

〔『統後撰集』巻十八・雑歌下・懷旧・一二〇五〕

①の除棄歌は『統後撰集』一二〇五で、抜かれた後に文暦二年本『新勅撰集』一一〇〇を定家が入れたと推測する。『統後撰集』一二〇五の主題は「懷旧」で、出典は『紫禁和歌集』八〇〇、次のようにみえる。

同比（建保四年七、八月のころ）、二百首和歌

百歌やふるき軒ばのしのぶにもなほあまりある昔なりけり

また、文暦二年本『新勅撰集』一一〇〇の主題は「雑の冬」で、

出典は『建保三年 院四十五歌合』六十一、次のようにある。

三十一番 左勝

左衛門督藤原朝臣

あかつきと恨みし人はかれはてうたてしぐるるあさぢふの宿

右

右近中将藤原朝臣

しばしのこる在明の月の山のはにまだきしぐれのかきくもり
つつ

左方申曰、右歌させる事なく侍り、右方申曰、うたてし
ぐるるあさぢふの宿、尤よろし、仍為勝

『新勅撰集』一一〇〇は（暁と恨んだ人はすっかり訪れが絶えてしまつて、困つたことにますますしぐれる浅茅生の家であることよ）と女性の立場から詠んだ和歌で、「枯れ」と縁を持たせている、浅茅生の宿に露深く涙に暮れている様子が表現されている。詠んだ忠信は、叔母の七条院殖子は後鳥羽院の生母。姉妹が後鳥羽・順徳の女房であつた。承久の乱で後鳥羽方に参し越後に配流された。

『続後撰集』一二〇五は（古く荒れた軒端には忍ぶ草が生えているが、その忍ぶ草を見るにつけても、いくら忍んでも忍びきれない昔の御代であることよ。）と、「古く荒れた家」と「浅茅生の宿」、「忍ぶ草」と「露深く涙」が似ている。これらのこ

とから定家が『続後撰集』一二〇五を天福二年本から除棄し、その代わりに文暦二年本『新勅撰集』一一〇〇を入れた可能性が考えられる。

また、順徳院詠「もしきや」は『新勅撰集』一一五三、西行詠とも似ている。

題しらず

平泰時

世中に麻はあとなくなりけりこころのままのよもぎのみし
て（一一五二）

高倉院御時、つたへそうせさすること侍りけるに、かき
そへて侍りける 西行法師

あととめてふるきをしたふ世ならなむいまもありへばむかし
なるべし（一一五三）

たのもしなきみきにます時にあひて心のいろをふでにそめ
つる（一一五四）

『新勅撰集』一一五三歌の詞書では西行が高倉天皇に奏上した書状に書き添えてあつた歌二首のうちの一首である。一つ前の、『新勅撰集』一一五二歌の詠者、平泰時は、承久の乱で後鳥羽院が兵を挙げた、北条義時の男である。

順徳院詠は『百人一首』の巻末にある。『百人一首』九九歌、後鳥羽院の「ひとをし」も代替歌は不明だが、除棄された和

歌の可能性が考えられる。⁽⁶⁾

『明月記』貞永二年六月十六日に次のように記載がある。為家、宇都宮蓮生、為氏が『新勅撰集』最初に定家が撰んだ和歌を見ていた。

貞永二年（天福元年）（一二三三）

六月十六日 巳時許、金吾、伴侍従并外祖来（依数奇、為見撰歌也）

『新勅撰集』撰集を始めてまだ一年目の頃、「数奇に依り撰歌をみるためなり」と為家が、蓮生、為氏を伴ってきたことから、現『百人一首』九九、一〇〇歌が『新勅撰集』に採用されていることを知っていた。⁽⁷⁾

四

『新勅撰集』における配列を検討してみると、次のような承久の乱関係者に関わる歌群①から⑦が見出せる。

①

和歌所歌合に、海辺秋月といへる心をよみ侍りける

小侍従

おきつ風ふけひのうらによる浪のよとも見えず秋のよの月

（二六九）

百首歌に、月歌

前関白

むらくもの峰にわかるるあととめて山のはつかにいづる月かげ（二七〇）

うへのをのこども、海辺月といへる心をつかうまつりけるついでに

御製

わかのうらあし辺のたづのなくこゑに夜わたる月のかげぞひさしき（二七一）

秋歌たてまつりけるに

正三位家隆

すまのあまのまどほの衣夜やさむきうら風ながら月もたまらず（二七二）

名所月をよめる

藤原光俊朝臣

あかしがたあまのたくなはくるるよりくもこそなけれ秋の月かげ（二七三）

①の歌群は、巻四・秋歌上にあり、主題が「月」である。直前の山の月から二六九の小侍従で海辺の秋月に展開する。この和歌は、後鳥羽院主催の『建仁元年八月十五日撰歌合』で俊成と番となった和歌であり、俊成判は持である。二七〇歌は山の月、二七一歌は海辺の月、二七二歌は海の月、二七三歌は海の月である。二七〇の詠者、道家は、定家に後堀河天皇の命を

伝え、直接関わった人である。(同集に入集は三首)、その次に後堀河天皇の御製を配し、後鳥羽院と関わりの深かった家隆、光俊と続く。和歌では二七〇で「むら雲が峰から離れ去っていく、そのあとに山の端からわずかに月が出たことだ」とあり、山の端からのぞく月を詠み、二七一から二七三まで海辺の名所が詠まれる。二七一は「和歌山」、二七二は「須磨」、二七三は「明石」と西に向かつての移動があり、「永遠の月の光、浦風とともに冷たい月の光、空には雲のない月」と詠まれている。

②

題しらず

入道二品親王道助

わがやどの菊のあさつゆいろをしこぼさでにはへ庭の秋風

(三二七)

秋歌よみ侍りけるに

権大納言忠信

なくなくもゆきてはきぬるはつかりのなみだのいろをしる人
ぞなき(三一八)

鎌倉右大臣

わたのはらやへのしほぢにとぶかりのつばさのなみに秋風ぞ

ふく(三一九)

如願法師

月になくかりのはかぜのさゆる夜にしもをかさねてうつ衣か

な(三二〇)

真昭法師

あらしふくとほ山がつのあさ衣ころも夜さむの月にうつなり

(三二一)

擣衣の心をよみ侍りける

曾禰好忠

衣うつきぬたのおとをきくなへにきりたつそらにかりぞな
くなる(三二二)

②の歌群は巻五・秋歌下にあり、六首で形成されている。主
題は三二七は「露、菊」、三一八は露から「涙、雁」、三一九は
「雁、秋風」、三二〇「雁、風、衣うつ」、三二二では雁が無く「風、
衣うつ」、三二二「雁、衣うつ」となる。詠者では三二七の後
鳥羽院の皇子である道助法親王、忠信、後鳥羽院と親交の深かつ
た実朝、如願法師、真昭法師(北条實時)ときて、曾禰好忠(九二三
—一〇三年頃生没)と配されている。三二二の曾禰好忠は時
代順の配列になっていない。三三〇(b)、三三一(c)は代
替歌とし、前述している。

佐藤恒雄氏は三三〇から三二九までの和歌を取り上げ、「時
間的な「進行」は見られないわけではない。……定家はここで、
多様なきぬたの歌を集めて変化に富んだ一群を構成しようとし
たのであるが、結局、「進行」において『新古今和歌集』のこ

とき緊密な連続を得ることはできなかったようである。……配列は杜撰であり、歌群内部における統一も不十分」とされている。一方、『続後撰集』の三九〇から四〇四歌をあげ、『新古今和歌集』の「きぬた」の歌ほど必然性は感じないが「連想」による流れもいちおうスムーズとされている。

③

題しらず

鎌倉右大臣

もののふのやそうち河をゆく水のながれてはやくとしのくれ
かな（四三七）

五十首歌よませ侍りける時、年のくれををしむといへる
心を 入道二品親王道助

とどめばやながれてはやく年波のよどまぬ水はしがらみもな
し（四三八）

正三位家隆

つらかりし袖のわかれのそれならでをしむをいそぐ年のくれ
かな（四三九）

如願法師

あすか河かはるふちせもあるものをせく方しらぬとしのくれ
かな（四四〇）

③の歌群は巻六・冬歌にある。主題は「歳暮」である。

四三九以外は、共に「川」を詠みこみ、年の暮れは川の流れるように早く過ぎていくといった内容であり、四三九は早さではなく、年の暮れを惜しむのを後朝の別れと重ねている。詠者は実朝、道助法親王、家隆、如願法師と後鳥羽院に近い人たちである。四四〇（c）は代替歌とし、前述した。

④

題しらず

平重時

こがれゆくおもひをけたぬなみだがはいかなるなみのそでぬ
らすらむ（七〇一）

百首歌たてまつりけるこひのうた

如願法師

山河のいしまのみづのうすごほりわれのみしたにむせぶころ
かな（七〇二）

建保六年内裏歌合、恋歌

権大納言忠信

まきもくのあなしの河のかはかせになびくたまものみだれて
ぞ思ふ（七〇三）

④の歌群は巻十一・恋歌一にある。主題は「不逢恋」で、共に川が詠まれている。七〇一の詠者、平重時は後鳥羽院が討とうとした北条義時の三男である。後鳥羽院と敵方ではあるが、このような配列に定家が残したかかったものを感じる。七〇二は建保四（一二二六）年正月に詠進した後鳥羽院百首中の一首で、

この百首から『新勅撰集』に撰入された如願法師の歌はこの一首のみ。七〇三、建保六年（四年の誤り）内裏歌合が出典で、順徳天皇の内裏で催された。判詞は定家で持。唯一、本歌合からの『新勅撰集』に採られた忠信の歌である。

⑤

（題しらず）

僧正行意

いたづらによそぢのさかはこえにけりみやこもしらぬながめ
せしまに（一一四二）

如願法師

なみだもてたれかおりけむからころもたちてもゐてもぬるる
そでかな（一一四三）

藤原光俊朝臣

しのぶるもわがことわりといひながらさてもむかしととふ人
ぞなき（一一四四）

⑤の歌群は卷十七・雑歌二にあり、主題は「述懐」である。

一一四二歌の作者、僧正行意は順徳院の護持僧で、建保期に歌壇活動があった。この歌は、都も知らない物思いに耽っている間に空しく四十の坂は越えてしまったのであったよ、という歌である。一一四三歌は、自分の袖がいつも涙で濡れているのを涙で織った唐衣であるからか、いつも濡れている、としている。

一一四四歌は、昔のことを尋ねてくれる人がいないことをさみしく思っている、といった内容である。

⑥

遠鐘幽といへる心を

入道二品親王道助

はつせ山あらしのみちのとほければいたりいたらぬかねのお
とかな（一一七五）

暁述懐の心をよみ侍りける

正三位家隆

おもふことまだつきはてぬながき夜のねぎめにまくるかねの
おとかな（一一七六）

⑥の歌群も雑歌二にある。主題は「暁の述懐」で、道助法親王、家隆がみえる。鐘の音が共通で、一一七五は、初瀬山よ、嵐の道が遠いので、聞こえたり聞こえなかったりする鐘の音であることよ、で、一一七六は、思うことが尽きてしまわない長い夜の寝覚めに負ける鐘の音であるよ、である。一一七五歌の出典は不明だが、一一七六歌は『道助法親王家五十首』が出典である。

⑦

前関白家歌合に、名所月をよみ侍りける

正三位家隆

ひかりそふこのまの月におどろけば秋もなかばのさやのなか
山（一二九二）

藤原光俊朝臣

すみわたるひかりもきよし白妙のはまなのはしの秋のよの月
(一二九三)

⑦の歌群は卷十九・雑歌四にある。主題は歌枕「遠江」で、一二九二は「さやのなか山」、一二九三は「はまなのはし」である。出典はどちらも『名所月歌合』で、九条道家が自邸で催した歌合である。各人三首。作者は二二名で、道家の側近と親子が目立つ。一二九二は、光が増す木の間の月にはつと気付くと、秋も半ばのさらの中山であるよ、で、一二九三は、澄みわたる光も清らかである。白い浜―浜名の橋の秋の夜の月よ、である。以上のように歌群①から⑦を考察してきた。それによると、まさに後鳥羽院たちの幻影が読みとれる。

おわりに

此草子、去年内々進入之時、所書留也。切弁哥等摺除訖。
其闕文之跡甚見苦。永不可他見。

右の一文は、書陵部蔵『新勅撰和歌集』の奥書で、「文暦二年三月十二日清書進覧之由、伝聞云」の条文末尾から一行あけ、二文字程度下げたところにある。

『新勅撰集』は藤原定家が、後堀河天皇から、貞永元年

(一二三三)六月十三日に撰進を命じられた勅撰集であるが、百余首を切り出して進上した際に、草稿本を書写した本を家に留めた。その本にも、除棄歌に削除の処置を施し、摺り除き、除かれた空白部分、欠文が至る所に生じた『新勅撰集』は、撰者として見るに忍びない、永く他見すべからず、とあるが、全く見えないように摺り除いてしまおうとは考え難い。だが、この約四年前、寛喜二年(一二三〇)七月六日に定家は次のように『明月記』に記している。

又近日若有其事者、事跡頗不似前々例、進退可谷事歟、前代御製、尤以殊勝、撰之者、可充滿集之面、事跡機間可然哉、聖代之勅撰、前代之御製數多者、當時之所見、有忌諱之疑、略其數者、定又有世間之謗歟、前宮内・秀入道、弥可讒言彈指、彼は極難測、窃以、暫可過此程哉

もし今、勅撰集を選ぶとすると、後鳥羽院の歌が集中に充滿するだろうから、内容も時期も適当でないと、いった内容だ。後鳥羽院の歌を集中して撰集してしまうことも予測していたし、『千載集』に平家の歌人は「よみひとしらず」で歌を入集させていることなどから、三上皇と雅成親王の和歌は採れない、と予測できたであろう。しかし、天福二年本に撰ぶべき和歌を収めていたと考える⁽¹⁰⁾。

また当初、定家が入れていた和歌を除棄した所に、その除棄歌を匂わせる和歌を定家が入れて修訂していること、⁽¹⁾乱関係者である、光俊、藤原忠信、如願法師、道助法親王の詠歌、実朝、真昭法師、家隆も含めた複数の歌群があることから、定家の乱関係者に対するこだわりがあったことを『新勅撰集』の配列から読み解いてみた。

注

(1) 山下三十鈴氏「新勅撰和歌集の構成」(『古今新古今とその周辺』一九七二)は『新勅撰集』の配列方法を考察され、「四季の歌は季節の移り変わりの流れに沿って混乱の生じないよう処置するという伝統的な編纂意識に準じており……作者及び詠作年代に観点を移して再検討してみる。……ここでは霞、柳、梅花を主題とする歌群を例として、次表に示す。すべての歌に関して詠作年代を知ることができないので、一応の目安として作者の初出勅撰集名」から各作者の活躍期を検討され、「多少の前後はあるとしても、各主題ごとにそれぞれ古い時代から新しい時代へと年代順に配列されていることがわかる。……一八〇二までの曾根好忠の歌四首と梅花の第一首目が源実朝であること」に注目され、「主題の区別も明ら

かではなく、ただ配列美の不自然を解消するために一卷全体の移行を考えた上で加えられたにすぎないとみられる。……切継ぎの際に除棄されたのは多く承久の乱に関係の深かった後鳥羽院、順徳院などの歌であり、加えられたのは鎌倉幕府関係の人の歌であったと推測されれば実朝はその筆頭であり、三〇、三一と二首連続して実朝の歌であり、前者が「青柳」、後者が「梅花」と主題を分かち位置であることから、この二首はやはり切入れ歌であろう。」と述べられている。

(2) 樋口芳麻呂氏「『百人一首』への道」『文学』一九七五

(3) 佐藤恒雄氏「『新勅撰集』羈旅歌寸感」『新勅撰和歌集』日本古典文学影印叢刊 月 報 一三 一九八〇

(4) 「『新勅撰和歌集』除棄歌」(二〇一九年九月一日 第七回東西文学術研究所 研究例会 於 関西大学)

(5) 順徳院詠と似た歌は、次の哀傷・一二六二、一二六三、また、雑歌四・一二七二に見える。

文集、親愛自零落存者仍別離といふ心をよみ侍りける

八条院高倉

あすかがはけふのふちせもいかならむさらぬわかれはまつほど
もなし (『新勅撰集』卷十八・雑歌三・哀傷・一二六二)

題しらず

行念法師

さだめなき世にふるさとをゆく水のけふのふちせはあすかかはらむ
〔『新勅撰集』卷十八・雑歌三・哀傷・一二二六三〕

（名所歌よみ侍りけるに） 真昭法師

あすか河かはせのきりもはれやらでいたづらにふく秋のゆふ
かせ
〔『新勅撰集』卷十九・雑歌四・大和・一二七二〕

一二六二も飛鳥川を詠み、変わりやすくこの世は無常、
一二六三は無常な世の中を生きているので、明日どうなるの
かもわからない、一二七二も飛鳥川を詠み、飛鳥川は霧も
すっかり晴れきることなく秋の夕風はむなく吹いているこ
とだ、といった内容でこれらの歌も何らかの可能性があるか
もしれない。

（6）樋口芳麻呂氏「百人秀歌から百人一首へ」〔『文学』
一九七一年七月〕は、「新勅撰集未定稿本は、なお未精撰の
段階の本ではあったが、後堀河院が崩ずるまで手許に留め、
定家自身としても、自己の見解・好尚のままに撰定している
点、精撰本（B）よりははるかに好ましく考えられたのである
ろう。そこで百人一首を撰する際には、新勅撰集については
未定稿本に拠り、未定稿本に収載されていた後鳥羽院・順徳
院の歌のなかから、「人もをし」「ももしきや」の歌を選んだ
のではなかろうか。百人秀歌が新勅撰集精撰本の撰集方針を

継承しているのに対し、百人一首は、新勅撰集未定稿本の方
針を是認しているのであるう。」と述べられている。（『未定
稿本』とは本稿でいう天福二年本、「精撰本（B）」とは、文
暦二年本のことを指している。）

（7）藤本孝一氏「百人一首の伝来について」〔『しぐれ』
第一四七号 二〇一九年一月二〇日〕は、「二条家歌学を受
け継ぐ宮中の御所伝授の中に『百人一首』が含まれているこ
とから、二条家伝来ではないかと、常々考えていた。……『百
人秀歌』の内題「百人秀歌」の割注に「嵯峨山庄色紙形京極
黄門撰」とあり、障子に貼られた色紙から収録されたことを
示し、「京極黄門（定家）撰」が『明月記』記述の内容と一
致することから『百人一首』の原形といわれている。……為
氏は直接山荘に赴き、色紙を書き写していたと思われる。二
条家にとつては、色紙は唯一の定家歌書原本であった。それ
だけに大切にされて、解釈が深まり、六条藤家流から学んだ
と思われる独自の二条家の古今伝授の中に含まれていたと
思われる。さらに、定家の神格化に伴い、『百人秀歌』から
三人を取り除いて天皇を入れて『百人一首』を作っていった
と想定される。」と述べられている。

（8）佐藤恒雄氏「続後撰和歌集の配列」〔『藤原為家研究』笠

問書院二〇〇八

(9) 『新勅撰抄』に一一四三歌は、「承久の乱をなげきてよめる哥なるべし」とある。『新勅撰抄』は、序跋・奥書類がなく著者・成立未詳、江戸時代後期の注釈書。

(10) 『新勅撰集』序文は、「……いはゆる古今後撰ふたつの集のみにあらず、おほやけごとにならずへてあつめしるされたためし、むかしといひいまといひ、その名おほききこゆれど、このへの雲のうへにめされて、ひさかたの月にまじはれるもがら、このことをうけたまはりおこなへるあとはなほまれなり……又寛喜貞永のいま、世をさまり、人やすくたのしきことのはをしらしめむために、ことさらにあつめえらばるるならし……」とあり、公卿に列する者で、勅撰集撰集を承り執り行つた事例は、とはいへ稀だ。……また、寛喜貞永の現在、世の中がよく治まり人はゆつたりとして、精神的身体的に満ち足りた言葉があることを知らせるために、格別に撰集なさるのであるらしい、といった内容だ。勅撰集撰者になかなかないことから、真摯に向き合い、本来の撰集をしたと推測される。また現在の世が安定していることを示すため、三上皇らを除棄したことをも示していると考えられる。

(11) 鎌倉幕府に配慮し、『新勅撰集』で全く三上皇らの和歌

は採られず、次の『続後撰集』で三上皇らが採られたことを、『新勅撰集』とほぼ同時代評『越部禪尼消息』では、『新勅撰集』を非難している。現在では『続後撰集』で三上皇らが採られていることを「除棄された歌人たちの復権」とされ、田淵句美子氏（『流謫の後鳥羽院』『国文』九五、お茶の水女子大学国語国文学会二〇〇一、佐藤恒雄氏（『解説』『続後撰和歌集』和歌文学大系三七明治書院二〇一七）、吉野朋美氏（『流謫の形象——『続後撰和歌集』における六条宮雅成親王詠』『続後撰和歌集』和歌文学大系三七 月報四六明治書院二〇一七）らが論じられている。『新勅撰集』に全く採られていないのに『続後撰集』で三上皇らの和歌が八一首採られている、この差から、乱のことを一層人々に印象づけたようにも感じられる。また『明月記』に定家が出家してから『新勅撰集』成立まで、為家が一〇九回登場することから、編纂方針や入集歌人についての伝授をしていただろうことが推測できる。定家は為家に伝えるため、数々の工夫、除棄歌を匂わせる和歌を入れたり、乱関係者の複数の歌群を配したのかもしれない。だが、今となっては憶測の域を出ない。

（たきくら ともよ／本学大学院生）